

カレーライスと赤チン

北野小学校長 丹羽 郁人

五年生と共に「山の学習」に出かけた。飯盒炊飯、落ち葉スキー、アスレチック、オリエンテーリング、そしてキャンプファイヤー……。

自然の中で、仲間と共に生き生きと活動する五年生は、頼もしくもあった。

班で協力をして飯盒炊飯に取り組んだ。石を並べて炉を作った。

薪をナタで割った。米と水を入れてといた。ジャガイモ、にんじん、たまねぎを切って鍋に入れ、タイミングよくカレーのルーを入れた。分担して協力して、カレーライスをみんなで作った。それは「特別」のカレーライスに違いなかった。だから、うまかった。ご飯が焦げたり、しゃびしゃびだったりした班もあったかもしれない。じゃがいもやにんじんの切り方が、いびつだった班もあったかもしれない。でも、うまかった。「失敗」は最高のソースとなり、それはきっと、高級レストランの完璧なカレーライスより、格別にうまかった。

どうか、その味も、香りも、その時の友の笑顔も、覚えていてほしい。

そして、自分たちの力でやり遂げたことに胸を張ってほしい。



「転ばぬ先の杖」の意味を国語辞典で引いてみる。「何事にも用心するに越したことが無い」というたとえ」とある。

転ばないように杖があったほうがいいのか、ないほうがいいのかと問われれば、もちろんあったほうがいいであろう。しかし、子供たちに「転ばぬ先の杖」を与え続けたらどうだろう。転ばないから、転んだ時の痛みを知らずに、怪我をしないような転び方も学べず、転んだあとの起き上がり方も知らないまま大人になってしまう。

小学生のころ、私はよく転んだ。私たちの幼少期は、擦り傷の膝小僧に赤チン（「赤いヨードチンキ」の略。正式には「マーキュロクロム液」）をつけた。傷が完全に治る前にまた転ぶので、年がら年中、私の膝小僧は赤かった。だけどそうやって、転んだ痛みや、痛くない転び方や、再び立ち上がって歩き出す強さを、学んできたと思っている。

今の大人たちは、「転ばぬ先の杖」を与え続けすぎていないだろうか。

私はあの日、子供たちのつくった、ご飯がちよっぴりしゃびしゃびの、「特別においしい」カレーライスを食べながら、そんなことを考えていた。